

女性が変われば...

鶴見区役所 藤井一彦

私が、社会教育主事という仕事をさせていただくようになってから丸二年たつ。

この間、仕事を通じて本当に多くの女性たちと出会い、話を聞く機会に恵まれた。学級や講座での話し合いも含めれば、五百人を軽く越える人たちであると思う。

こうして、たくさんの女性たちから、いろいろな話を聞いているうちに、私は「女性が社会で生きていくのは、本当に大変なんだ」と思うようになった。例えば、結婚によりほとんどの女性が姓を変え(させられ)ることをはじめとして、家事・育児・介護は女性の仕事とされ、共働きの家庭でも、これらのことはほとんど女性がこなしている。また、女性であるがために自分の好きな職業を選べないこ

22
22
22
22
22
22
22
22
22
22

とがあったり、場合によっては結婚退職、出産退職、介護退職を余儀なくされる。

このように、女性は自分以外の都合で人生を分断されることが多く、ライフワークや自己実現としての仕事を現実的にも意識のうえでも持ちにくい。女性が社会に出て一人前と言われるまでには、多くの場合男性より後ろのスタートラインから走り始めるなくてはならないし、ハードルも数多く、高いので大変だと思ふ。

一方、男性はというと、職場は戦場である。業績は棒グラフで競争だし、連日の残業をぬって、上司や同僚との付き合いも多い。疲れた体にムチ打って、休日には家族サービス。レジャーだ、ショッピングだと二十四時間戦えますかの世界。

こうした生活を夫婦で送っていると、始めは小川の兩岸を歩いていて、互いを確認しあえる

距離にいたはずが、気が付くと大河の兩岸にいたなんてことになり、対岸に行くのに命懸けで泳ぐことになってしまう。
ちょっと大げさな例だったと思うが、こういった状況は、多かれ少なかれ、それぞれの夫婦の間にあると思う。今、女性たちは気付き始めて、どんどん変わって来ているが、男性は旧態依然である。現在の男性の結婚難は数の上からだけでなく、男女の意識の差によるところが大

きそうだ。また、進んでいる(?) アメリカでは、メンズ・
△あとがき▽
最近のコンピュータや通信などのエレクトロニクス技術の発達には目をみはるものがあり、ほんの数年前には、夢と共に語られていたことが、次々と現実のものとして私たちの前に現れてきている。今や、通信衛星を利用してTV放送が家庭に普及し、ISDN(総合デジタル通信網)の構築なども進んでいる。このように情報技術革新はさまざまな面で加速度的に進展し、産業経済の省力化・効率化を高

リブなんて運動も起こっている。時代は女性解放から男性解放へ動いていくのかも知れない。
九四年は国際家族年だそう。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一〇二九)。
この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等題材は自由。一〇〇〇字以内。

めるのみならず、文化や私たちの生活様式も変えようとしてつづつある。ホームショッピングやホームバンキングなど、時間、空間に制約されない生活も可能になるうとしていく。

そうした変化に対応し、行政においてもOA化、ネットワーク化を進め、市民サービスの向上、行政事務の効率化等を目的としたさまざまな情報システム構築が行われつつある。

もちろん情報化社会については、サービスの向上や多様化、

余暇時間の増大など「光」の部分と、情報の氾濫やプライバシー保護、セキュリティ対策など、解決すべき「影」の部分があり、これまでもいろいろな形で指摘がされてきた。

そうした情報化社会において、私たちの社会は実際にどう変わっていくのであろうか。今回の特集では、現在進められている各種の取り組みなどを通して、情報化社会の姿を描いてみた。

そのなかで、情報化社会は、知的活力の危機の時代だというご指摘もいただいた。システム化された制度や組織に頼って、個人の主体的力量が低下する恐れがあるというのである。

情報化社会は、人間の知恵を結集したもの、不断の研究開発による技術革新がもたらしたものであり、その到来を否定すべきものではない。

しかし、その輝かしい面を奪われることなく、それが「人間」のための技術革新だということを忘れずにいたい。いま、そこが問われている。

△伊藤孝▽